愛国主義と節税
――ノエル・カワードと小説『威風堂々』――

増　田　珠　子

Ⅰ　はじめに

20世紀の英国を代表する劇作家であり，俳優，演出家，映画監督，作詞家，作曲家，歌手としてもその才能をいかんなく発揮したノエル・カワードは，熱烈な愛国主義者としても知られている。愛国劇として評判になった『カヴァルケード』（*Cavalcade*）が1931年に初演された際に，舞台挨拶で「私たちは困難な時代に生きていますが，それでも英国人であるというのはとてもわくわくすることだと皆様がこの芝居をご覧になって感じてくだされば，と願っています」（*Autobiography* 239）と述べたことで，愛国主義者カワードのイメージが固まった。その後も彼は，1942年初演（執筆は1939年）の『幸福なる種族』（*This Happy Breed*）に，祖父が孫息子に英国の将来展望への自信を語って聞かせるという結末を与えた（*Plays Four* 370-372）。同じく1942年に公開された映画『軍旗の下に』（*In Which We Serve*）では，友人でもあったマウントバッテン卿をモデルとする駆逐艦の理想的な艦長を自ら演じ，英国海軍を褒め称えた。さらに，1960年5月にエリザベス二世の妹のマーガレット王女が結婚した際には，約30年前に使ったのとまさに同じ表現を用いて，「英国人であるというのは，やはりとてもわくわくすることだ」（Payn and Morley 438）と日記に記している。

しかし，このように英国のすばらしさを称え，英国人であることへの誇りを公言しているカワードは，一方で1956年に英国の自宅を引き払ってバミューダ[1]に居を移し，その後1959年にはスイスに移住している。理由は節税だった。カワードは所得税を納めないで済むようにするため，自らの祖国を去ったのである。これは愛国主義者が取りそうな行動とは到底言いがたい。

だが，カワード自身は，バミューダへの移住について，「これは愛国心に欠けているからというようなことではない」（Payn and Morley 294）と日記に書き残している。わざわざ日記にそのように書いたということは，節税のために祖国を離れれ

[1] バミューダは英国の海外領土で，タックス・ヘイヴン（租税回避地）として知られている。

ばバッシングを受けることになると予想できたからだろうが，彼はなぜそのような危険を冒してまで移住を決意したのだろうか。また，なぜ英国を裏切ったと見なされても仕方のないような行動を取りながらなお自分は愛国心の持ち主であると自負できたのだろうか。彼にとって，自分を英国人足らしめているものとは何だったのだろうか。

Ⅱ　移住を決意した理由――当座貸し越しの衝撃と「不幸なる強欲」

まず，カワードが移住を決意するにいたった理由を考えてみよう。大戦間期から第二次世界大戦終了まで，カワードは英国の演劇界および社交界の寵児だった。『渦巻き』（*The Vortex*, 1924年初演）の大成功で一夜にしてスターとなった彼は，その後『花粉熱』（*Hay Fever*, 1925年初演），『私生活』（*Private Lives*, 1930年初演），『陽気な幽霊』（*Blithe Spirit*, 1941年初演）といったヒット作を次々に発表した。

しかし，第二次世界大戦後のカワードは，かつてのような大成功を収められなくなった。大戦中に爆撃を受けたドゥルリー・レーン劇場の再開を華々しく飾るはずだったミュージカル『太平洋1860』（*Pacific 1860*, 1946年初演）は，カワード自ら「失敗作」（*Play Parade* xviii）と認めざるをえないものとなった。同じくミュージカルの『クラブのエース』（*Ace of Clubs*, 1950年初演）もヒットせず，カワードは友人への手紙に「『クラブのエース』が本物の大当たりにならず，怒り心頭に発している」（Day 566）と書いたほどである。『南海泡沫事件』（*South Sea Bubble*, 1956年初演）も，主演のヴィヴィアン・リーの途中降板という不運にも見舞われ期待通りの大成功とはならなかった。上演回数を比べると，『私生活』の1944年のロンドンでの再演が716回，『陽気な幽霊』にいたってはロンドン初演が1,997回だったのに対し，『太平洋1860』のロンドン初演は129回，『クラブのエース』は211回，『南海泡沫事件』は276回と遠く及ばない[2]。劇評家からの評価という点でも，興業収入という点でも，カワードは満足できる作品を生み出せなくなっていた。

さらに，株式仲買人からカワードのビジネス・パートナーに転身して米国での代理人を務めていたジャック・ウィルソンの失策および裏切りにより，カワードが様々な金銭的損失を被っていたことが，1947年に明らかになった。彼はウィルソンのせいで予想外の罰金を払わされたり，印税をごまかされたり，米国での税金を支払いすぎたりしてしまったという。金銭的損失を被った歳月は20年以上にも及んでいた

[2] 各作品の上演回数については、Mander and Mitchenson を参照した。

と指摘されている（Day 95，97-98，448-453，Hoare 330-331，374，Lesley 257，Payn and Morley 94-95）。

このようななか，1954年，カワードは，自分の収入を管理しているノエル・カワード有限会社が19,000ポンドも当座貸し越しになっていると会計士から知らされ，不安に陥った。それ以前からカワードは「お金を湯水のように使う傾向があったため，しばしば慢性的に金欠状態にあった」（Salewicz and Boot 27）のだが[3]，ここまで巨額の当座貸し越しになっているとは想定外だったのだろう。印税が入ってくる予定があったため，会計士はこの事態を楽観視していたようだが，カワード本人は，そのような事態になってしまうまで何も知らされなかったこと，さらにその当座貸し越しを保証するため，彼の唯一の備えである生命保険を会計士が使ったことに対し，怒りにかられた（Payn and Morley 241，Lesley 333）。この発覚の直後，カワードはラスヴェガスでのショーへの出演を承諾するが，その動機はまさにお金だった。彼は同年11月14日の日記に，「春に3週間出演して税金なしで20,000ポンドの蓄えができるなら，好むと好まざるとにかかわらずやるべきだと絶対に思う。お金は必要だし，非課税でその金額はばかにしたものじゃない」（Payn and Morley 244）と記している。

カワードがここで「非課税」ということにこだわっているのは注目に値する。というのも，この時期の英国の所得税の税率は非常に高かったからである。彼が子役として活動を始めた頃の1910年財政法において，累進付加税（super-tax）の導入が決定された。このとき，所得税の税率は「1ポンドに対して1シリング2ペンス（税率：約5.8%）」（矢内286）で，「累進付加税は，個人の所得が5,000ポンドを超える場合，3,000ポンドを超える金額に対して1ポンド当たり6ペンス（税率2.5%）が所得税に加算される」（矢内286）と定められた。その後，カワードが成長して演劇界で認

[3] カワードは1948年にジャマイカに土地を購入した際、「将来、金庫がそれほど空っぽでもないときに、そこに家を建てよう」（Day 542）と考えたという。実際には、ジャマイカにブルー・ハーバーおよびファイアフライという2軒の家を建てるにあたって、カワードはケント州の家にあったロールスロイスを売却して支払いに充てた（Payn and Morley 99）。様々な場所に不動産を所有している一方で、当座貸し越しになる以前から現金が潤沢にあったわけではないことがうかがえる。ある友人は「ノエルはお金に関しては多くの点で子どものようなところがありました。彼はお金を理解していませんでした。投資とかそういった類のことは何も知らず、もちろんたくさんのお金が入ってきましたが使ってしまって、そのせいでイギリスの所得税のことで面倒に巻き込まれてしまったのです」（Salewicz and Boot 69）と証言している。

められるようになっていくのと並行して，所得税の税率も累進付加税（所得税と統合されて1929年に付加税［sur-tax］と名称変更された）の税率も上昇を続けた。「税負担はもちろん富裕層にいちばん重くのしかかることになった」（Havighurst 423）のである[4]。カワードの立場に立てば，成功し，収入が増えれば増えるほど，所得税率も高くなっていってしまった。軍事費が予算を圧迫していた第二次世界大戦末期には，標準税率は50%となり，個人の場合に基本税率に加算される付加税率は，表1のとおりだった。

表1　1944-1945年の英国の付加税率

所得額	付加税率（%）
£2,000まで	なし
£2,000-2,500	10
£2,500-3,000	11.25
£3,000-4,000	16.25
£4,000-5,000	21.25
£5,000-6,000	25
£6,000-8,000	28.75
£8,000-10,000	35
£10,000-15,000	41.25
£15,000-20,000	45
£20,000以上	47.5

出所：矢内 p.294より筆者作成

この高い税率を英国の人々が受け入れたのは，ナチス・ドイツに是が非でも勝利しなければならぬという意識からだったと考えられる。

また，その影響力の大きさについては議論の余地があるものの，第二次世界大戦中に高水準の支出と課税を覚悟のうえでケインズ主義と福祉国家を受け入れようというコンセンサスが生じたと，多くの歴史家が指摘している（Daunton 17）。このコンセンサスの帰結として，第二次世界大戦の終了後，労働党のアトリー政権が1942

[4] ロイドは、この所得税に加え、1940 年に導入された購買税が最も重くのしかかったのも上流階級の人々だと指摘している（Lloyd 253）。購買税は贅沢品ほど税率が高く設定されていた。

年のベヴァリッジ報告にのっとって実際に福祉国家建設に舵を切ると，やはり多額の出費が必要となった。1948年から実施された国民保健サーヴィスの費用のうち，国民保険で賄われたのは約15%で，大部分は国庫から支出されていた（Teed 287）。さらに「1948年のベルリン危機で始まった再軍備のための支出は，1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると倍になった」（Havighurst 433）。第二次世界大戦は終結したとは言え，当時の英国において税負担が軽減される余地などなかったことは明らかである。カワードが金銭的に窮地に陥っていると発覚した1954年当時の標準税率は45%だった（矢内295）。付加税率は表2のとおりだった。

表2　1954年の英国の付加税率

所得額	付加税率（%）
£2,000まで	なし
£2,000-2,500	10
£2,500-3,000	12.5
£3,000-4,000	17.5
£4,000-5,000	22.5
£5,000-6,000	27.5
£6,000-8,000	32.5
£8,000-10,000	37.5
£10,000-12,000	42.5
£12,000-15,000	47.5
£15,000-20,000	50
£20,000以上	50

出所：“Rates of Surtax 1948-49 to 1972-73”より筆者作成

このように，この時期の標準税率は第二次世界大戦末期よりも少し下がっているが，付加税率の方は金額帯によってはむしろ上昇している。仕事に勤しみ収入を上げれば上げるほど税率が高くなってしまうのである。カワードの場合，「約20,000ポンドの所得税」（Payn and Morley 294）を支払っていたという。すなわち，それだけ多くの収入を上げていたということであり，その収入を使って，ロンドンの住居に加えてケント州にカントリーハウスを所有し，ジャマイカにも家を建て，少なから

ぬスタッフを雇っていたのである[5]。庶民では真似のできない贅沢な暮らしをしていたカワードは，恵まれていたと言うべきだろう。しかし，劇作家としての勢いの衰え，ジャック・ウィルソンがもたらした金銭的損失，さらに巨額の当座貸し越しという衝撃的な経験などのせいで，彼は自分の将来に不安を抱くようになった。ホアは，「フリーランサーのエンターテイナーであるために金銭的に不安定だという意識が生じた」のであり，その意識のルーツは子役として家計を支えたカワードの貧しい生い立ちにあると指摘しているが（Hoare 436），まさにこの意識が当座貸し越しの事件をきっかけに高まって彼を苛んだと言える。そして，この結果，カワードは英国が彼に課す税金を意識せずにはいられなくなったのである。

カワードが英国の所得税に不満を持った背景として，たとえ高い税金を納めたとしても彼がその見返りを得られる状況になかったということも指摘できる。彼は英国に複数の住居を所有していたものの，実は英国でそれほど多くの時間を過ごしていなかった。1950年代のカワードに多くの収入をもたらしていたのは，キャバレーやテレビのショーへの出演だった。彼はロンドンのカフェ・ド・パリのほか，ラスヴェガスのデザーテッド・イン，CBS テレビのショーなどに出演し，米国で人気を博していた。そのほか，ブロードウェイなどで自作が上演される際にも渡米していた。また，創作活動の拠点はジャマイカだった[6]。このような状況で「1年に8週間しかイングランドにいないのに，その恩恵に浴するために約20,000ポンドの所得税を納め」なくてはならないという事態は，カワードには「まったくばかばかしい」ことだと思われたのである（Payn and Morley 294）。

母のヴァイオレットが1954年に亡くなると，カワードが英国内に居住する必然性が失われた。1955年12月4日，ついに彼は日記に節税目的でバミューダに移住する決意と，それは愛国心の欠如からではないという言い訳を記した。また，同月12日の日記にも，バミューダ行きについて以下のように書き込んでいる。

> この決定で節約できるものはほとんど信じられないくらいだ。現状では1年に25,000ポンドから50,000ポンドを内国歳入庁に支払う義務がある。これからは

---

[5] ホアによれば、移住を決意した時期にノエル・カワード有限会社が内国歳入庁に提出した必要経費は一年につき 100,000 ポンドにも及んでいたという。内訳は、住居費、人件費、交際費などであった（Hoare 418）。

[6] カワードの「後期の作品のほとんどはジャマイカで書かれた」（Payn with Day 198）という。

> そのお金は全部バミューダにある銀行に非課税で置いておけるだろう。5年たって，61歳になったとき，もしすべてがうまくいっていれば数十万ポンドの資金を貯めていて，死ぬまで左団扇で暮らせるだろう。日光と安定した天気に飽きて，リューマチでギシギシいう我が老骨を愛する故国に埋めたくなったときには，もう一度イングランドで暮らす余裕さえあるかもしれない。何年にもわたって私の稼ぎの大半を奪い，私に公の名誉を与えてくれることもなく，あらゆる機会に私をせせら笑って罵倒し，しばしば私にとても不幸な思いをさせる故国ではあるが。普通の英国人は私を好きでいてくれるのは分かっているし，とても大勢の人たちが私を誇りに思ってくれている。私の作品を通じてずっとそうであってほしいと心から願っている。だが，もし意気揚々たる歳月の後ずっと暮らしていけるだけのお金がなかったら，この抽象的な愛情と誇りを知っていたところで，私が年を取ってくたびれたときの支えにはならない。(Payn and Morley 295)

カワードはこのような非常に辛辣な口調で冷徹に自分の将来展望を語っている。さらに，同じ日の日記のあとの方では，「そこ［イングランド］に住んで赤字を出さずにやっていくのは不可能だ。私が生涯にわたって英国政府にいったい何十万ポンド支払ってきたかは神のみぞ知ることだし，お返しに得た特典は実のところ取るに足らない」（Payn and Morley 296）と断言している。

こうした記述から，カワードが英国の所得税が高すぎて老後の生活資金を十分貯められないと危惧していることと，英国に対して相反する屈折した思いを抱いていることがよく分かる。彼は，表向きは，「ジャマイカとアメリカでの仕事がとても多いので」，「ニューヨークへ楽に通えるところ」に住むのが妥当なのだと主張していた（“Coward Shifts Home”）。だが，日記のなかの「左団扇で暮らせる」という表現が端的に示しているように，彼は税金を支払うために今の生活水準を見直したり改めたりしようとは考えず，庶民の感覚とはかけ離れた贅沢な暮らしを老後も維持しようと模索していたのである。また，彼が恨みがましく言及している「公の名誉」とは，1942年末に考慮の対象になったと知らされて期待しながらも結局与えられることのなかったナイト爵位のことと考えられるが，この時期すでに彼よりも年下の俳優たちに与えられはじめていた[7]。例えば，ラルフ・リチャードソンとローレ

[7] カワードがついにナイト爵位を授与されたのは、最晩年の 1970 年のことだった。

ンス・オリヴィエは1947年に，ジョン・ギールグッドは1953年に授与されている。カワードはサーの称号を得られなかったことについて，1942年12月31日の日記に「これでおしまい。もうこのことは考えまい」（Payn and Morley 20）と記しているが，内心は穏やかではなかったようで，コール・レスリーによれば，チャーチル首相やその友人で新聞経営者のビーヴァーブルック卿が妨害したのではないかと疑っていたという（Lesley 224-225）。

節税のために移住するというカワードの決意は，当然，英国内で反発を招き，当時のマスコミは英国を裏切ったとして彼を激しく非難した（Fisher 220-221，Hoare 427，Lesley，Payn and Morley 178-179，Morley 118）。彼の『ヴァイオリンを持つ裸婦』（*Nude with Violin*，1956年初演）をもじり，「税金25,000ポンド」と書かれた布を腰に巻いた裸のカワードが，『幸福なる種族』ならぬ「不幸なる強欲」（“THIS UNHAPPY GREED”）という題名の曲の楽譜を前にヴァイオリンをかまえる姿が，風刺画に描かれたこともある（Lesley，Payn and Morley 178）。

しかし，「私の両親は金の苦労で相当に悩んでいた」（*Autobiography* 9）という貧しい下層中産階級の家庭に育ち，「できるだけ早く金持ちになって成功すること」（*Autobiography* 56）を夢見て自らの才能と努力でのし上がったカワードには，自力で手に入れた贅沢な暮らしをあきらめる選択肢などありえなかった。そのような暮らしは，彼のアイデンティティの一端を担っていたからである。それは確かに「不幸なる強欲」のなれの果ての姿かもしれない。しかし，「金持ちになって成功すること」を目標に子役の時代から励んできた彼にとっては，「不幸なる強欲」を断念することこそ，自らのアイデンティティを否定することにほかならなかったにちがいない。そして，金銭的に十分に満たされることが，望んでも得られない名誉への渇望を補完する一助となっていたのだろう。だからこそ，彼は英国を離れる決意をしたのだ。

Ⅲ　親英的な架空の英領植民地

このようにカワードにとってバミューダ行きは必然の決断だったのだが，冒頭で指摘したように，彼は節税のために移住することは愛国心の欠如を意味しないと主張している。「愛国主義者であること」は「金持ちになって成功すること」と並んでカワードのアイデンティティの拠り所として非常に重要だったと考えられるが，「愛国主義者であること」と「英国内に居住せず英国に所得税を支払わないこと」は，どのような考え方をすれば両立するのだろうか。

一見矛盾しているように思われるカワードの主張を理解するためには，まず，彼の愛国心がどのようなものだったかを確認する必要があるだろう。彼は1931年の『カヴァルケード』の大成功によって愛国主義者と見なされるようになったのだが，注目しておかねばならないのは，『カヴァルケード』において理想とされているのが，英国がかつての「威厳と偉大さと平和をもう一度見出す」（*Plays Three* 197）ことだという点である。初演当時の1931年の英国ではなく，「威厳と偉大さと平和」に満ちた過去の英国，すなわちかつての大英帝国に価値が見出されているのだ。そして，20世紀初頭の様々な社会の変化を経て，第一次世界大戦で多くの犠牲を払った英国人の「信じがたい地獄の苦しみから不思議な天国の幸福を作り出した雄々しく勇敢な精神」（*Plays Three* 197）が褒め称えられている。「英国人である」とは，単に英国の国民だということを指すのではなく，「威厳と偉大さと平和」に満ちた過去の英国を作り上げた人々に連なる者であるという意味合いを明らかに含んでいるのだ。

その後の作品でも，提示される愛国心のありように変化は見られない。第二次世界大戦中に執筆・上演された『幸福なる種族』では，主人公フランクが英国のことを「どんなに頑張ったところでこれまで誰も壊せたことのないもの」（*Plays Four* 371）と呼び，自分たちがその一員であることを誇らしく語っている。ここでも，『カヴァルケード』においてと同じく，連綿と受け継がれてきたものが英国にはあるのだと示唆されたうえで，そのような英国の一員であることが称えられている。また，フランクは続いて「つい最近，俺たちはちょっとたるんでいて，信頼してくれている人たちをがっかりさせてしまって，騒がしいつまらないやつらが銃やら爆弾やら飛行機やらをたくさん使って威張り散らすのを止められずにいるっていうのは，認めざるをえないさ。でも，心配することはない――そんなことは長くは続かない」（*Plays Four* 372）と語る。第二次世界大戦前夜の英国の憂慮すべき状況と，これから果たすべき使命，そしてその使命を英国人は果たせるはずだという信念を端的に伝えるこの台詞からは，『カヴァルケード』で提示されたのと同様の愛国心が読み取れる。

このように，カワードが作品中にくりかえし描き出した愛国心の対象には，かつての輝かしい英国のイメージが重なっている。彼が称えたいのが，今彼の目の前にある英国――国内外の情勢の変化のなかで大英帝国からコモンウェルスに衣替えせざるをえず，もはや太陽の沈まぬ帝国とは呼びがたい存在――ではないということは，明らかである。当然，第二次世界大戦後になって，政権を握った労働党が「ゆりかごから墓場まで」をスローガンに福祉国家建設を開始したという事態を，彼が

理想の英国の姿として受け入れたとは考えがたい。すでに引用したように，彼は税金と引き替えに得た特典を「取るに足らない」と見なしている。例えば国民保健サーヴィスが提供した無償の医療など，彼にとっては納めた税金の対価に見合うものとは思えなかったのだろう。

このようにカワードの愛国心の対象と彼の目の前にある英国との乖離は次第に広がっていったのだが，そうしたなかで彼が英国に対する愛情を描くための舞台として選んだのが，架空の英領植民地の島サモロだった。カワードが初めてサモロを創作したのはかなり古く1935年のことだが，サモロと愛国主義がはっきりと結びつけられたのは，1949年に『本国と植民地』（*Home and Colonial*）として執筆され，1951年に『アイランド・フリング』（*Island Fling*）として米国で上演されたのち，1956年にロンドンで初演された『南海泡沫事件』だった[8]。この芝居はサモロの英国からの独立の是非を取り上げているものの，植民地問題を扱う政治的な作品ではまったくなく，植民地の島において宗主国英国が頼られ愛されていることを示している。そして，この作品の主人公たちが再び登場するカワード唯一の長編小説『威風堂々』（*Pomp and Circumstance: A Novel*, 1960年出版）では，独立の是非が問われることすらなく，エリザベス女王とエディンバラ公の来訪の知らせに沸き，歓迎の準備に右往左往する島の人々の様子が面白おかしく描かれる。白人のサモロ人への差別意識は揶揄されているが，一方で英国によるサモロの植民地支配自体は肯定すべきこととして提示されている。作品のそこかしこに英国人であることへの誇りや喜びが描き出されていて，その著者は間違いなく愛国主義者だろうと読者に印象づけるような内容となっている。実際，出版から約50年後に『ワシントン・ポスト』紙に掲載された書評は，この作品について，

> 半世紀前，エリザベスとフィリップはまだ若く美男美女であったこと，そして過去四半世紀の幻滅はまだこれから起こるところだったということを思い出す必要がある。また，カワードが不遜で軽薄であったとしても，心底から愛国的な英国人であったことも心に留めておくべきだ（Yardley）

[8] サモロは『南海泡沫事件』以前に，『今夜八時半開演』（*Tonight at 8. 30*）の一編である『私たち踊ってたの』（*We Were Dancing*, 1935年初演），ミュージカル『太平洋1860』の舞台となっている。また、短編小説「エッジヒル夫妻」（“Mr. and Mrs. Edgehill”，1944年執筆）も，サモロ島と同じくサモラン諸島の一つであるカウリ島を舞台としている。

と述べている。

サモロのモデルは『本国と植民地』執筆時にカワード自身によってジャマイカと断言された（Payn and Morley 125)[9]。しかし，サモロのありようは，例えば英領植民地でありつつも米国の影響を強く受けているといった点ではジャマイカの現実を反映していると言えるが[10]，政治的な面では明らかに創作されたものである。現実のジャマイカは，19世紀に奴隷制度廃止にともなってプランテーション制度が崩壊しはじめ，1865年のモラント・ベイの反乱を招いた。また，20世紀になると世界的な経済不況を背景に直轄植民地制度への不満が高まり，暴動が勃発するようになった。そして1944年に普通選挙制が導入，1959年に完全内政自治権を獲得するに至り，その後1962年8月に独立を果たすことになる。ジャマイカ以外においても，植民地独立の動きは第二次世界大戦終結後に世界中で加速し,『威風堂々』が出版された1960年は，アフリカで脱植民地化が急激に進んで「アフリカの年」と呼ばれることになった。もちろん英国もこのような動きと無縁ではなかった。1956年にはスーダン[11]，1957年にはガーナとマレーシア，1960年にはソマリア[12]，キプロス[13]，ナイジェリアが英国から独立している。

しかし,『威風堂々』の英領植民地サモロは，語り手でもある主人公の在サモロ英国人女性グリゼル・クレイギーによって，以下のような説明を付されている。

> しかし，幸運なことに，サモロ人は温厚で陽気な人々だった。政治には関心がなく,英国の庇護のもとでこの上なく幸せだと実感できるだけの分別があった。

---

[9] サモロは『本国と植民地』執筆以前は、「カワードが1920年代、30年代に極東を色々と旅した際に訪れた数多くの場所の混合物」（Payn with Day 38）であり、『私たち踊ってたの』で初めて登場したときは、スマトラ島近辺の島という大雑把な位置づけだった（*Tonight at 8. 30* 19)。その後、『太平洋1860』執筆時に「北緯18度」「西経175度」という正確な位置が付与された（*Play Parade* 3)。この設定は『威風堂々』にも引き継がれている。

[10] 当時のジャマイカの状況や米国の影響力の大きさについては、ジャマイカが英領になって300年の記念行事（1955年）を分析したジョンソンの論を参照した（Johnson 120-137)。

[11] スーダンの場合は、英国とエジプトからの独立となる。

[12] ソマリアの場合は、英領ソマリランドとイタリア領ソマリランドがそれぞれ独立し両者でソマリアを形成した。

[13] マッキンタイアによれば、キプロスの1960年の独立が画期的な先例となって、ジャマイカとトリニダードの1962年の独立につながった（McIntyre 54)。

もし貧しい人々が多くて産業も混乱を来していたりしたら，ＳＳＮＰ［サモロ社会主義国民党］は人々をあおって不当な扱いに気づかせ憤激させるチャンスに恵まれたかもしれないし，「サモロ人のためのサモロ」という腹黒いスローガンはもっと効果を挙げたかもしれない。だが実際は，彼らには特に何か不当な扱いを受けているという意識はなく，サモロはほかならぬサモロ人のためのものだという考えを思いつかないのだ。……サモロの人々は英国の帝国主義について本当に何も知らない。一八五〇年代にケフマラニ一世から英国人に島が引き渡されたが，王は――あとから賢明であったと分かったのだが――自分よりも彼らの方が手際よく統治と支配ができるだろうと考えたのだ。血は一滴も流れなかった。鉄のかかとに踏みにじられた先住民もいなかった。実のところ，何がしか踏みにじられたと言えば，公共の福利のために根絶やしにされた海賊だけだった。故国では労働党，モスクワではロシア人，ワシントンではアメリカ人，そしてここではＳＳＮＰが行っている，英国のくびきから自由になって自治領サモロになろうというキャンペーンの支持者は，サモロ諸島全体でもほんの一握りしかいなかった。（*Pomp and Circumstance* 99-100）

このサモロはジャマイカの現実をまったく反映していない。宗主国の側の願望が生み出した架空の場所にほかならない。

実はグリゼルは，英国にはないサモロの良さを素直に認められる人物で，サモロ人をつねに見下す白人たちとは一線を画す存在として登場している。総督官邸が「アッパーミドルクラスの狂信的愛国主義の居心地の良い牙城」（*Pomp and Circumstance* 224）だった前総督の時代とは違ってサモロの人々に対して広く門戸を開くようになり，また政治的立場による区別の垣根も低くなった今のサー・ジョージ・ショッターとレディ・アレクサンドラ（サンドラ）の時代を，彼女は「進歩した」（*Pomp and Circumstance* 224）ととらえている。全編を通じて，あからさまにサモロ人を差別する人々の言動が揶揄の対象になり，その結果グリゼルのほうはむしろ人が好すぎて要らぬトラブルに進んで巻き込まれるきらいはあるものの妥当で支持すべき感覚の持ち主という印象を与える。しかし，その彼女ですら英国中心主義の枠の内側から出てはいないのだ。

この作品が出版されたころ世界では脱植民地化が進んでいたことを考えれば，サモロ人を見下す白人たちのありようが批判すべきものとして描かれたり，英国にはないサモロの良さを認められる人物が主人公に据えられたりしているのは，上流階

級の欺瞞を暴いて風刺による笑いを生み出すというカワードの得意とする手法を可能にすることであると同時に，時代の風潮に逆らわないことであったと言える。しかし，まさにスエズ動乱の起こった年にロンドンで初演された『南海泡沫事件』のサモロと同じく，「アフリカの年」に出版された『威風堂々』のサモロもまた，植民地問題が生じている現場そのものではなく，「崩壊しつつある大英帝国にとってかけがえのないすべてのものを象徴していた」（Payn with Day 38）のだ。大英帝国の過去の栄光が英国人にとって心地よいかたちで今なお生きているこの想像上の島サモロを，カワードは英国への愛情を描き出すのにふさわしい場所として選んだのである。

Ⅳ　『威風堂々』の焦点

カワードが日記で初めて『威風堂々』を書いていることにふれたのは，1955年11月20日，すなわちバミューダ移住の決意を記すちょうど二週間前のことである。執筆に取り組みはじめてから一週間が過ぎたところというこの時点で，すでに女王夫妻のサモロ島訪問が島のコミュニティにどのような影響を与えるかを描くという骨格が固まっており，天が自分に与えた最大の才能と自負するコメディの才を存分に活かした「陽気で不敬で感傷性に乏しく重要性はまったくない」（Payn and Morley 293）作品が目指されていた。

カワードの当初の意図のとおり，『威風堂々』は皮肉と風刺と滑稽さにあふれ，笑いに満ちている。語り手で主人公のグリゼルは，バナナのプランテーションを経営する英国人の夫ロビンと子どもたちともにサモロで暮らしている。総督夫人サンドラ，サモロに住む恋人バニーに会いに島にやってくる公爵夫人エロイーズ，そしてサモロ生まれでレズビアンのダフネとは，まだ独身だった第二次世界大戦中に英国のＭＴＣ（機械化輸送隊）でともに活動した仲間である。実母から「お前はまったく簡単に言いくるめられてしまうんだから」（*Pomp and Circumstance* 266）と指摘されてしまうほど人情に篤く気の良い女性であり，友達であるバニーやサンドラから頼まれごとをすると断ることができない。気が進まないながらもバニーが誰にも知られずにエロイーズに会えるよう彼女を自宅に泊めることにしたり，サンドラに言われるまま女王夫妻来訪の歓迎準備にかかわったりするのだが，事態はグリゼルの予想もしなかった方向へつねに展開していき，彼女は図らずも怒涛の三か月間を過ごすことになる。

まずバニーが水疱瘡にかかって恋人との逢瀬どころではなくなったため，二人が

密かに会えるようグリゼルが不本意ながらも一生懸命に立てた計画が台無しになる。エロイーズもやがて発症するが，バニーからうつったと周囲の人々に気づかれないよう，グリゼルは彼女が感染したのは熱帯の未知のウィルスだと苦し紛れの嘘をつく羽目に陥り，明らかに不自然なその嘘を見破られないようさらに頭を悩ませることになる。加えて，エロイーズの世話をするために病院から派遣された看護師は糖尿病が持病で，低血糖発作を起こして一時昏睡状態になってしまい，グリゼルの家は大混乱に陥る。水疱瘡をきっかけにすれ違いが生じたバニーとエロイーズはやがて破局してしまい，グリゼルは双方を慰めるのに苦心する。エロイーズがダフネとそのパートナーのリディアの家に招待されて泊まりに行くと，ダフネがエロイーズに心を奪われたのにリディアが嫉妬し，ここでも大騒動が起こって，エロイーズはグリゼルの家に逃げかえってくる。グリゼルと夫のロビンはバニーとエロイーズの不倫を隠そうとあれこれ画策していたのだが，その苦労もむなしく実はサモロ中の人々がこの二人が恋人関係であるというゴシップを知っていたと分かる。さらに妻がサモロで病に倒れたという報道を見たエロイーズの夫が，何の予告もなしに英国からやってきて，グリゼルの予想に反して妻とバニーのことは承知していると告白するのである。

このバニーとエロイーズをめぐる騒動と並行して，グリゼルは女王夫妻歓迎の準備にかかわるのだが，そちらも決して平穏に進まない。そもそも正式発表されないうちから秘密のはずの女王来訪を誰もが知っていることが判明し，グリゼルを愕然とさせる。旧知のサンドラからその情報を教えてもらった彼女は，サンドラに言われた通り内密にしておこうとするのだが，その日のうちにグリゼルの子どもたちの世話係ナニーも，夫ロビンも，英国に住むグリゼルの母までも，その情報を得ていると知ることになる。

さらに，その翌日グリゼルが総督官邸を訪れると，早くも女王夫妻の昼食の注文をどのホテルが受けるかをめぐって争奪戦が始まっている。グリゼルとサンドラが女王と直接言葉を交わせる50人のリストを作るのに取りかかると，候補者は143人にも上ると判明する。候補から外せば相手を傷つけるのは必至で恨みを買うことになると分かりつつ，二人は何とか人数を絞り込もうとするのだが，苦心して削った途端に横やりが入ってその候補者を復活させざるをえない事態が生じ，頭を抱えることになる。

グリゼルはまたサンドラに言われて歓迎行事の実行委員になる。サモロ人1名を含む計11人のメンバーから成るその委員会では，サモロの伝説を扱うウォーター・パ

ジェントを行うことが決まるが，準備の過程で，当事者にとっては大いに深刻だが第三者から見れば些細だったり滑稽だったりする出来事が相次いで起こる。出演者の着替えの場所や駐車場の確保といった物理的な問題，台本のあまりの平凡さ，作曲の遅れ，予定外のドレスリハーサルの実施をめぐる意見の対立，女王陛下の前で出演者が裸をさらすわけにはいかないのでカエルの着ぐるみを着ようという奇想天外なアイディアへの対処，出演者のスキャンダルをめぐる実行委員同士の子どもじみた言い争いなど，厄介ごとは絶えない。結局ドレスリハーサルはうまくいかず，挙句の果てに大雨が降ってきて，天候の回復が見込めないなか，ウォーター・パジェントの実施は見送られることが決まる。

こうした騒動を描き出すにあたってカワードのコメディの才は確かに存分に発揮され，当初目指した通り「陽気で不敬で感傷性に乏しく重要性はまったくない」世界が生まれているが，すべての根底には女王夫妻への深い敬愛と信頼が存在している。そして，その背景には，サモロに住む英国人たちがたとえ海外で生活していようとも母国とのつながりをしっかりと保っているという状況がある。

例えば，サモロに暮らしていても英国の情報を手に入れることは比較的容易である。ある日のサモロの新聞『ザ・リーパー』には，ジュネーブで開かれた和平会談，英国首相の議会での発言，英国外務省の声明，カンタベリー大主教の病気，サモロ総督の公務，アナイリン・ベヴァンがウェールズの保養地で行った演説，米国大統領の発言，サモロでの自転車事故といったニュースが掲載されている（*Pomp and Circumstance* 56）。英国の家族からの手紙で英国の様子を知ることも多い。

女王夫妻のサモロ訪問は，このように英国と日々つながりながら暮らしているサモロの英国人たちにとって，大いに喜ぶべき出来事である。グリゼルは，女王夫妻のサモロ訪問のニュースを聞いて，「それって島にとってすばらしいことになるわ。サモロの人たちはすごく誇らしく思ってわくわくするでしょうね」（*Pomp and Circumstance* 14）と口にするのだが，似たような反応はナニーをはじめとして多くの人々が示すことになる。島にとって悪いことだと明確に反対意見を述べるのは少々ひねくれ者の英国人男性ブッダ一人だが，彼も来訪が引き起こすであろう混乱や騒動が気に入らないだけで，女王夫妻については「ハンサムでチャーミングで慈悲深くて，その仕事［サモロ訪問］を有能に理知的にやってのけるだろう」（*Pomp and Circumstance* 96）と手放しで褒め称える。たとえ英国を離れて生活していようとも，在サモロ英国人にとって女王夫妻が敬愛の対象であることが強調されることになる。

加えて，女王は決して権威主義者ではなく，すべてを受けとめて肯定してくれるはずであり，その好意的なまなざしは白人の英国人のみならず植民地の人々にも等しく向けられるはずだという無条件の信頼も提示される。例えば，来訪の時期がちょうど雨季に当たることをグリゼルが残念がると，ナニーは，女王がイングランドで雨のなかでもいつも平然と公務をこなしていることを根拠に,「陛下はそんなこと気になさいませんわ」（*Pomp and Circumstance* 23）と明るく断言する。また，ウォーター・パジェントをめぐって，実行委員のグリゼルとエズモンドはサモロの精を演じる予定のサモロ人キーラのことで以下のようなやり取りをする。

「サモロの精がアクアラングをつけて登場するなんてうまく想像できないわ。」
「ああ，アクアラングは水面に飛び出してくる直前に取ってしまう予定だよ。彼が本当に心配しているのは，女王陛下の前で事実上裸になるということだけさ。」
「女王陛下はそんなこと気になさらないと思うわ」と私は言った。「世界中で戦いの踊りや部族の踊りや奇妙な現地人の祝宴をご覧になるのに慣れてらっしゃるもの。そうしたわけの分からない原住民たちのあとでヌードのサモロ人を一人目にするだけなら，女王陛下にはいい息抜きになるだろうって考えるべきよ。」（*Pomp and Circumstance* 198）。

さらに，書記官の妻でサモロ人をつねに見下しているクックー・ハニーが，女王が海賊の子孫でサモロ生まれのジュアニータの店で食事を取ることに反対して，英国人のサー・アルバートの経営する店に行くべきだと主張すると，グリゼルは「女王陛下はご自分の領土や植民地にお出かけになるとき，あちこちで黒人の血が混じっている人たちにお会いになるのをしっかり覚悟していらっしゃると思うわ」（*Pomp and Circumstance* 252）と主張する。

女王はすべてを平然と受けとめてくれるはずだというこうした信頼の根底には，「若くて愛らしい女王陛下とハンサムな旦那様」のもと，英国とその植民地は「皆すばらしい大家族の一員」（*Pomp and Circumstance* 22）なのだという英国人の側の意識が存在している。そして，この点に対しサモロ人が異を唱える場面など，英国中心的な『威風堂々』には当然出てこない。当時の英国では「『非政治的』で超国家的でリベラルな君主制は，帝国の統合の意識を維持するのに不可欠だと考えられていた」（Olechnowicz 243）と指摘されているが，架空の英領植民地サモロにおい

ても，女王夫妻は帝国統合の意識を支える存在なのだ。

このように『威風堂々』は，植民地の人々から愛される宗主国を描いた『南海泡沫事件』では中心人物だったサモロ人ハリ・アラニが完全に脇役に退いていることからも明らかなように，海外に住む英国人と母国との関係に焦点を当てている。出版時の書評はサモロの英国人たちを「愛国的な国外移住者」（Pippett 33）と呼んだが，これこそ，まさにカワードの目指したありようだと言える。「陽気で不敬で感傷性に乏しく重要性はまったくない」という見かけの下で，この小説は愛国主義者と名乗れる条件を追求し，女王夫妻に対する敬愛と信頼という答えを導き出しているのだ。世界のどこに住んでいても，女王に忠誠を誓う心を失わなければ愛国主義者でいられる――これこそ，『威風堂々』の世界が示唆していることである。

カワードは，王室への愛情という点では誰にも負けない自信があったはずである。福祉国家への転換をはかる第二次世界大戦後の英国において，唯一彼を魅了する存在であったのが王室の人々だったのかもしれない。アンドリュー・ローゼンは「20世紀の後半，長年英国の生活の中心となっていた様々な制度が国民の支持を失った」として，その一例として王室を挙げて権威と影響力が衰えたと述べているが（Rosen 39），カワードにはこの指摘はまったく当てはまらなかった。まだ十代の若者だった第一次世界大戦中こそ，「我が国王と国家への義務は，自分のキャリアを追求することの絶対的な必然性に比べると大して重要でないように思われた」（*Autobiography* 56）というカワードだが，1920年代に入ると，ヴィクトリア女王の曾孫マウントバッテン卿夫妻やジョージ五世の四男ケント公夫妻と親しくなった。シェリダン・モーリーは，「ノエルは実際，宮廷に友人がいた――エリザベス女王，エリザベス皇太后，マーガレット王女は言うまでもなく，ウィンザー王朝の陰の実力者であるルイス・マウントバッテン卿を忘れてはなるまい」（Morley 143）と指摘しているが，これらの人々はカワードの日記に頻繁に登場しており，彼らの交流の深さを物語っている。カワードは，1951年2月にジョージ六世が亡くなった際には，「ひどいショックを受け，一日中，重苦しくみじめな気持でいた。ロイヤル・ファミリーの全員に心からのお悔やみの電報を打った」（Payn and Morley 189）と記しており，4月には「クイーン・マザーが出てくる実に鮮明な夢を見て目覚めたら，女王陛下ご自身からのお悔やみ状へのお礼状が書留の航空便で届いた。たくさんのお仕事を抱えていらっしゃるだろうに，ご自分でお書きになるとは，なんとチャーミングな振る舞いだろう」（Payn and Morley 190）と感激している。また，彼とエリザベス皇太后は，皇太后が1965年2月にジャマイカにあるカワードの別荘を訪れて彼の手作

りの昼食を取ったほど，親しかった。当時のカワードの日記からは皇太后の訪問への期待と緊張が読み取れる（Payn and Morley 591–593）。王室の人々の人間的魅力もカワードを引きつけたのだろうが，同時に，彼らとの交流は彼の名誉欲を満たしてくれる心地よい事柄であったにちがいない。

このように，たとえ英国内に居住していなかったとしても，英国に税金を支払うことに抵抗していたとしても，カワードが英王室への敬愛や関心を失うことはなかった。そしてその気持ちは，マーガレット王女の結婚に際しての言葉が端的に示しているように，英国人であることへの誇りにつながっていた。この王室への敬愛とかつての大英帝国を肯定する心情が行き会ったところに生まれた作品が『威風堂々』だったのである。主人公のグリゼルが語る以下の言葉は，カワード自身の考えを代弁するものと言えるだろう。

> 王室崇拝は，適度なものだったらなかなか良いものだと思うし，大賛成だ。王冠はシンボルであって，それ自体途方もなく重要なものだし，またそうであるべきだ。……私はシンボルには光り輝きつづけてほしいし，雲の上の存在でありつづけてほしい。全力をあげて価値を下げるのに取り組もうとする動きはあるが，ありがたいことに私たちの国と植民地と自治領においてはまだ大丈夫だ。（*Pomp and Circumstance* 92）

英国のシンボルたる王室の人々への敬愛を失わないことこそ，カワードにとっては何にも勝る愛国主義者の証だったにちがいない。だからこそ彼は，バミューダへ移住してもなお自分は愛国心を欠いていないと断言することができたのだ。

V　おわりに

カワードが1913年に子役として迷子の男の子の一人スライトリーを演じた J・M・バリの『ピーター・パン』（*Peter Pan*, 1904年初演）に，次のようなせりふがある。

> フック　……なあ，相棒よ。海賊になりたいと思ったことはないかい？
> ジョン（一人だけ選ばれたことに目のくらむ思いがする）ぼく学校にいたとき——マイケル，どう思う？
> マイケル（目立つ場所に出てくる）仲間になったらなんて呼ばれるの？

フック　黒ひげのジョー。
マイケル　ジョン，どう思う？
ジョン　ちょっと待って，ぼくたちそれでもジョージ国王の立派な臣下なんだよね？
フック　お前は「ジョージ国王を倒せ」と誓わなくてはだめだ。
ジョン（堂々と）ならぼくはことわる！
マイケル　ぼくだってことわる。(Barrie 140)

ジョンとマイケルおよび迷子の男の子たちは，フックから海賊の仲間になるよう誘われ心が揺れ動く。だが，その魅力的な誘いと国王の立派な臣下であることを天秤にかけたとき，結論は一瞬にして下される。海賊の仲間になることを拒めば海に突き落とされる運命と分かってはいても，国王への忠誠心は何にも代えがたい守るべきものなのだ。裏を返せば，国王に忠実で居つづけられさえすれば，彼らは自らの欲求にしたがっただろう。この感覚こそまさに，節税をしてもなお英国を裏切ったことにはならないという発想の根底に存在するものである。かつてのスライトリーは約40年の時を経て，この感覚を拠り所にバミューダに居を移したのだ。ケネス・タイナンが1961年に語ったように，「カワードは『ピーター・パン』のスライトリーであったが，それ以来ずっと，すっかり『ピーター・パン』にはまっているのだとも言える」(Lahr 161) のだ。

引用文献

Barrie, J. M. *Peter Pan and Other Plays*. Peter Hollindale, ed. Oxford: Oxford UP, 1995.
Coward, Noël. *Autobiography*. London: Methuen, 1999.
-----. *Play Parade*. Vol. 5. London: William Heinemann, 1958.
-----. *Plays: Four*. London: Methuen Drama, 1994.
-----. *Plays: Three*. London: Methuen Drama, 1995.
-----. *Pomp and Circumstance: A Novel*. London: Methuen, 1999.
-----. *Tonight at 8. 30: Ten One-Act Plays*. London: Methuen Drama, 2009.
"Coward Shifts Home." *New York Times* 15 March 1956, late ed.: 36. Print.
Daunton, Martin. *Just Taxes: The Politics of Taxation in Britain, 1914-1979*.

Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Day, Barry, ed. *The Letters of Noël Coward*. London: Methuen Drama, 2007.

Fisher, Clive. *Noël Coward*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1992.

Havighurst, Alfred F. *Britain in Transition: The Twentieth Century*. 4th ed. Chicago: U of Chicago P, 1985.

Hoare, Philip. *Noël Coward: A Biography*. Chicago: U of Chicago P, 1998.

Johnson, Howard. "The 'Jamaica 300' Celebrations of 1955: Commemoration in a Colonial Polity." *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 26. 2 (May 1998): 120-137.

Lahr, John. *Coward the Playwright*. London: Methuen, 1999.

Lesley, Cole. *The Life of Noël Coward*. London: Jonathan Cape, 1976.

Lesley, Cole, Graham Payn and Sheridan Morley. *Noël Coward and His Friends*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1985.

Lloyd, T. O. *Empire, Welfare State, Europe: English History 1906-1992*. 4th ed. The Short Oxford History of the Modern World. Oxford: Oxford UP, 1993.

McIntyre, W. David. *British Decolonization, 1946-1997: When, Why and How did the British Empire Fall?* British History in Perspective. London: Macmillan, 1998.

Mander, Raymond, and Joe Mitchenson. *Theatrical Companion to Coward: A Pictorial Record of the Theatrical Works of Noël Coward*. 2nd ed. Updated by Barry Day and Sheridan Morley. London: Oberon, 2000.

Morley, Sheridan. *Noël Coward*. London: Haus Publishing, 2005.

Olechnowicz, Andrzej, ed. *The Monarchy and the British Nation, 1780 to the Present*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Payn, Graham, and Sheridan Morley, eds. *The Noël Coward Diaries*. London: Phoenix Giant, 1988.

Payn, Graham, with Barry Day. *My Life with Noël Coward*. New York: Applause, 1994.

Pippett, Roger. "Turmoil in Samola." Rev. of *Pomp and Circumstance*, by Noël Coward. *New York Times Book Review* 6 Nov. 1960: 33.

"Rates of Surtax 1948-49 to 1972-73." *Tax Structure and Parameters Statistics. HM Revenue & Customs*. 5 March 2014. Web. 13 March 2015.

Rosen, Andrew. *The Transformation of British Life, 1950-2000: A Social History*. Manchester: Manchester UP, 2003.

Salewicz, Chris, and Adrian Boot. *Firefly: Noël Coward in Jamaica*. London: Victor Gollancz, 1999.

Teed, Peter. *Britain 1906-1960: A Welfare State*. Rev. ed. London: Hutchinson Educational, 1967.

Yardley, Jonathan. "Noël Coward, the Author? What a Novel Idea, Darling." Rev. of *Pomp and Circumstance*, by Noël Coward. *The Washington Post* 23 Oct. 2009. Web. 9 March 2015.

矢内一好『英国税務会計史』中央大学出版部，2014年。